詞乃橋立

弘鴻編集

二

紀元二千五百四十六年三月九日

播州龍野

播　播科

播周　播州

出身

ホ 2
561
2

弘のをろし　あつむ

○第一章　體言（井コトバ）

體言とは世の中にあらゆる萬の物に名なり又形なくして目に見えぬものといへども人の想像にて物と定むるものは皆體言なるべし扨其躰言に種類を五つに分ちて其目を有形躰言、無形躰言、用語躰言、用器躰言、合語躰言といふなり斯くて躰言にも其物に限る名あり又公に通ふ名あり或ハ其形をあらはし或は其色をあらはすなど種々あまた

山口縣周防

門 加 号 561 巻 2止

も然まで小字ろさけまだそこのちえざるなり又こちても爰に其用なられざなり

一 有形躰言とは形あるものゝ名なり其例

をぢ（老翁）　たかやま（高山）

いへ（家）　ふで（筆）

はな（花）　とり（鳥）

ねこ（猫）

二 無形躰言とは形なきものゝ名なり其例

はる（春）　あした（朝）

ひがし（東）　いさを（功）

いのち（命）

三 用語躰言とは用言をすゑて躰言となしたるものをいふなり此は第二段の音又は第四段の音を言居ゑたるも此にて其解第三章 四 に弁ふべし其例

あふぎ（扇）　かみさし（笄）

あみ（網）　以上は第二段の音

はなぞめ（花染）　たむけ（手向）

たうゑ（田植）　以上は第四段の音

四 用略躰言とは用語躰言の下乃字を省略して又一の躰言となしたるものをいふなり其例

やど【り】（宿）　うた【ひ】（歌）

くも ら （雲）

五 合語躰言やまと躰言の二つ重なりて更に一つの躰言となりたるものをいふなり其例

すゞりばこ（硯箱） はるやま（春山）

やまがは（山川） なぎさ

六 復習の問題

左に掲ぐる躰言の名其種類の名を指示せよ

（一）さるだひこ（猿田彦） うずめ（鈿女）

ちびきいし（千引石） とつかのつるぎ（十拳釼）

にはとり（鶏）

（二）よろこび（喜） いかり（怒）

かなしみ（哀） たのしみ（樂）

はれ（晴） くもり（曇）

（三）まつかぜ（松風） かねのおと（鐘声）

ゆめ（夢）

（四）やまあそび（山遊） ふゆごもり（冬籠）

まとゐ（圓居） たかばゝき（竹箒）

ふづくゑ（文机）

（五）よど（淀） うたうら（歌占）

○

（六）有形体言五言をあげよ

（七）無形体言五言をあげよ

（八）用語体言三言をあげよ

（九）用畧体言三言をあげよ

　但し例の内外にかゝはらず

（十）合語体言三言をあげよ

○第二章　体言受辞（井コトバノウケテニヲハ）

躰言受辞とハ体言を其他の体言或ハ用言に結合せしめむ為に用ゐる辞をいふ之扱其辞にハ種々の種類あれど今其部分を別ちて聊大意を説明せんと左にしるすが如し

一　活用辞

為（シ）	セ	シ	ス	スル	スレ
為（シ）有（アリ）	セラ	セリ	セリ	セル	セレ
止（ト）有（アリ）	タラ	タリ	タリ	タル	タレ
在（ニアリ）	ナラ	ナリ	ナリ	ナル	ナレ

活用ある辞ハ体言によりて受得ざることそのもある

なり譬ば春せ、春じ、人せ、人じ、などといふを先ず
して春たり、人たり、春なら、人なら、などといは
るゝが如し又漢語に八活用なし皆此活用の受辞
かゝりて後に活用をなすものと志るべし

二 係辞　他言に言係くる辞なり

ハ　此と彼を分つ意あり

モ　此を彼に合する意あり

ゾナム　古言ナモと一つ数多き物の中にて此ゾと一つを指す辞なり

コソ　数多き物の中にて此コソと只一つを指す辞にてゾの最切なるものなり

ニ　於の字の意なり

ヲ　物をつかね合する辞なり

ヘ　方乃字の意にて彼方を指ていふ辞なり

三 連辞　言の中間にありて上下を連續する辞也

ノ　上を主として下を指す意あり

ガ　下を主として上を指す意あり

ツ　上下に軽重を分たず

四 歎辞

ヤ　其名乃廣きより狭きに及ぼす意あり

ヤ

ヨ　ヨは物を呼出す意ありヤと相通ひて用ゐ

まどもヤを他とありヨを自となることへ

カ　カナ（カナの十は字を添字なり古言にあ
カモといへり）

五 疑辞

カ

ヤ　カよりも軽し

六 接辞

ト　絶止りしたる言の後に接く辞なり
トモ（トにモの加はりたるなり）　チフ（トイ
フの約り）　テフ（同の轉ひ）　トフ（同の畧り）
テヘ（トイヘの約り）

七 助辞

言を助くる辞なり

シ

イ

ラ

八 雑の部

ダニ　さへを　なりとも　世俗にいへることおなじ
其意サヘに比ぶれバ尖にして狭し

サヘ　までもと俗にいへるが如し事を並べいふ
時乃辞なり其意おほらかにして廣し

スラ　でも　でさへ　世俗にいへるが如し大かた
ダニの意におなじ

ナガラ　其まゝの意なり

カラ　エヱといへる意あり又スナハチといへる意もあるなり

ノミ　ばかりと俗にいへるに同じ

バカリ　ころほひ　ほどにと俗にいへると同じ

ヨリ　ユ（ヨリに同じ）ヨ（ヨリの畧）俗言と其意
れなど

ナ　勿の字の意にて禁止むることありていふ辞なり

ユヱ　俗言と同じ

マデ　俗言と同じ

ナド　俗言と同じ

ラ　等の字の意にて其一つより他の等類にも言ひ及ぼす意あり

右の外にも受辞も猶あるべけれどもいまだ見あたらず

其例

（一）秋の野に人まつ虫の声すなり　古今集六

思ふどちまとゐせる夜は唐錦　同十七

君々たり臣々たり　論語

はかなきはそのゝ命なりけり　古今十六

（二）年のうちに春は来にけり　同一

霞たち木乃芽も春の雪ふれば　同一

色をも香をも志る人ぞ志る　同

柿本の人丸なむ哥乃ひじりなりける　同序

山里は秋こそことにわびしけれ　古今四

吉野乃山に雪はふりつゝ　同一

春毎になかるゝ河を花と見て　同一

都へと思ふも物のかなしきは　土佐日記

（三）

年のうちに春は来にけり　古今一

梅が香を袖にうつしてとゞめては　同一

天つ風雲のかよひぢ吹とぢよ　同十七

さゞ波や志賀の都はあれにしを　千載一

（四）

春やとき花やおそきと聞わかむ　古今一

苔の袂よかわきだにせよ　同十六

玉にもぬける春乃柳か　同一

いよゝ見まくのほしき君かな　同十七

（五）

春来ることを誰か志らまし　同一

春たつけふの風やとくらむ　同一

（六）

春たてば花とや見らむ白雪の　同一

など我恋の淵瀬ともなき　同十一

（七）

夢てふ物はたのみそめてき　同十二

啼とむる花しなければ鶯も　同二

紀の関守いとゞめてむかも　万葉四

（八）

庭もまがきも秋の野らなる　古今四

(八)
鶯だにもなかずもあるかな　同一
あすさへふらば若菜つみてむ　同一
[redacted]
櫻ちる花の所ハ春ながら　古今二
逢ふ人からの秋の夜なれば　同十三
きぶれこそ春を思ひし時だにぞ　同二
声ばかりこそむかしなりけれ　同三
鶯の谷より出るこゑなくば　同一
かりがねは聞ゆる空ゆ月立わたる　万葉十
物ならば我も声なきをぞ　古今三
春霞立ながら見し花ゆゑに　後撰三

君につかへむ萬代までに　古今廿
まいりたれども皆志をへてけゆながくうて　土佐日記
貫之らが此世に同く生れて　古今序

九
復習の問題

(一) 家といふ体言は其係辞を受けてよめ
(二) 梅といふ体言に其連辞を受けてよめ
(三) 吾妹といふ体言に其助辞を受けてよめ
(四) 月といふ体言に其歎辞を受けてよめ
(五) 花といふ体言は其疑辞を受けてよめ
(六) 切きる言に接く辞そ何なるか
(七) 連辞のノ、ガ、ツ、の意を説明せ

（八）活用辞の為といふ字を活かして讀下を

（九）カラやいへる意を俗訳せよ

（十）ダニ、サヘ、スラ、の意を弁解せよ

〇第三章　用言（ハタラキコトバ）

用言とハ体言に對する名にて作用形状の活様をいふ言なり其活用の大綱ハ本居春庭翁乃詞の八衢といふ書に其格を立て図に作りあらはされしより始て世に明かになりて人皆詞乃妙用を知る捷径を得たり扨其書の巻首にいへらく

言葉乃はたらきハいといふかくいひあらバいともくはしく妙なるものにしてさゝやかなることどもも其用様によりてことかはり活用にまがひつゝ意もことなるに聞えなどしてちがへることをいひこちよろばの様をかへりみかつに聊まぎるゝことなく又見るもの

きゝをる人々の心にかゝりしことあたる思ひのまゝ都て
世の中にありとしあることいへ千萬れとなりとも
いひ尽しまねびやらむにたらはぬことなくあかぬ
ことなきも此活によるはになむありける然るを
神代よりおのづから定りありて今の世にいたるま
でうつりかはることもなくいきてこそたがひあやまる
ことも其ことのかぎ其意聞えがたきものにし
あまた一文字といへどもとゞこほりては猥てえぞ
へなぐさまべておほろこのは思ひなさるべきをばよいあ
らぞなむかくていにしへの人をおのづからわきまへ
て用ひたゞふることをなかのはるを後の世となり

てもやうやうにうつりゆきつゝ誤ることとしもわすれゆく
なりぬるを世に見とがむる人もなくまれまれあげつ
らふ書も見えぬまでにいよいよみだれあやまることと
のみぞおほくなりゆくまにまにまだもののまなぞ
む人もいましくはたゞしくまなぶべきをよくこの音
ずへ深く考へひてものゝまことはなるをいろ
にとも思ひたゞらずしてことはざりにはくそ思す
ぞして猶あやまることおほきをいふにぞやされど
歌よくよみ文章よくかける人もそれのれよくたく
ろ得とてもまだおのづからのものにしあれどお
のづからあひてたゞふることをきくなるゝを初

學のやまがちもいとたどたどしくまぎらはしげにて
あやまることいとおほきまで今其人々にさとしお
しへむとていにしへの其さだまりをとりあつめあげて
委くわかちあかしつ此を詞の八衢となしゝ名づけを
るよしされかしこ言の葉に其活様によりていづか
たへもおそむきゆくものはしあまぞ道になぞら
へてかくてものしはるにかを見む人よくたどりて
ふくまんのふることとなむこのまき下畧
然て本書八衢の図今に至りてある聊其活用所属の行
相晉りたるにあらなきにしもあらざれば語彙別記
〔文部省の編集書〕詠歌心の種等は例によりてその図を改め

中二段は上二段といふべきを旧にしたがひてとゞめあらためず

たる所もありて斯くて其活用の様にも通常格四種と
其他に變格三種別格一種音雜の格二種ありて總計
十種あるなり

一 用言十種の大意

用言十種とも第一格四段用言、第二格一段用言、第
三格中二段用言、第四格下二段用言、此四格を通常
格といひ又第五格カ行變格、第六格サ行變格、第
七格ナ行變格、第八格ラ行別格ありて以上の八格
も事の作用を言ひあらはす言にて此を作用言と
いひ又第九格第一音雜用言〔カ行サ行の音雜なり〕、第十格第
二音雜用言、此二格も事の形状を言ひあらはす言

にて此を形状言といふあり扨其作用言にハ五段乃活用あり其目将然言、續用言、絶止言、續体言、已然言、なり又其形状言にハ六段の活用あり其目将然言、續用と将然を兼ぬる言、絶止言、續体辞言、續体言、已然言、なり

二 詞の八衢活用の図

各図中用言の下〇内にある番号ハ受辞の符なり其受辞のことハ第四章に委く弁ふべし

第一格四段用言ハ其言第一段の音より第四段まで活くものにてカ、サ、タ、ハ、マ、ラ、の六行にわたれり

第二格一段用言ハ其言第二段の音と又其音にル、レ、の加ありて活くものにてカ、ナ、ハ、マ、ヤ、ワ、の六行に渉れり

第三格中二段用言ハ其言第二第三の二段の音に又第三段の音にル、レ、の加ありて活くものにてカ、タ、ハ、マ、ヤ、ラ、の六行にわたれり

第四格下二段用言ハ其言第三第四の二段の音と又第三段の音にル、レ、の加はりて活くものにてア、カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラ、ワ、乃

十行にこそあれ

第五格カ行変格の用言はコ、キ、ク、乃三音の中に又ク、の音にル、レ、の加はりて活くぞ是なり

第六格サ行変格の用言はセ、シ、ス、の三音と又ス、乃音にル、レ、の加はりて活くものなり

第七格ナ行変格は用言ハナ、ニ、ヌ、乃三音の中に又ヌ、の音にル、レ、は加はりて活くぞ是なり

第八格ラ行別格の用言はラ、リ、ル、レ、の四音に活けども四段用言の別格なるゆゑは第二音のリ、乃字続用言と絶止言を相兼ね又其受辞も他格の一様ならざるあればなり

第九格、第一音雑格の用言はク、シ、キ、等にて物の形状をいひあらはせり又其受辞ハ前八格乃中と異なることあるなり

第十格、第二音雑格の用言はシク、シ、シキ、等にて第九格とおなじくして其受辞もまた相おなじ

右十格の用言各其例を設けて図にあらはしたるぞ是あり左に記すが如し

作用言	第一格 四段用言					
	カ行 飽	サ行 押	タ行 打	ハ行 逢	マ行 住	ラ行 釣
将然言 ㊀むに続く	カ	サ	タ	ハ	マ	ラ
續用言 ㊁	キ足る	シ行る	チ鳴す	ヒ見る	ミ捨る	リ揚ぐ
絶止言 ㊂	ク	ス	ツ	フ	ム	ル
續体言 ㊃	ク食	ス車	ツ皷	フ人	ム家	ル魚
巳然言 ㊄	ケ	セ	テ	ヘ	メ	レ

作用言	第二格 一段用言					
	カ行 着	ナ行 似	ハ行 干	マ行 見	ヤ行 射	ワ行 居
将然言 ㊀むに続く	キ	ニ	ヒ	ミ	イ	井
續用言 ㊁	キ馴す	ニ通ふ	ヒ乾ぶ	ミ明む	イ通す	井附く
絶止言 ㊂	キル	ニル	ヒル	ミル	イル	井ル
續体言 ㊃	キル衣	ニル人	ヒル麥	ミル書	イル箭	井ル人
巳然言 ㊄	キレ	ニレ	ヒレ	ミレ	イレ	井レ

作用言	第三格 中二段用言					
	カ行 起	タ行 落	ハ行 戀	マ行 恨	ヤ行 老	ラ行 舊
将然言 ㊀むに続く	キ	チ	ヒ	ミ	イ	リ
續用言 ㊁	キ出づ	チ積る	ヒ悲む	ミ思ふ	イ屈る	リ行く
絶止言 ㊂	ク	ツ	フ	ム	ユ	ル
續体言 ㊃	クル人	ツル葉	フル人	ムル事	ユル身	ルヽ年
巳然言 ㊄	クレ	ツレ	フレ	ムレ	ユレ	ルレ

第四格

下二段用言

	ア行	カ行	サ行	タ行	ナ行	ハ行	マ行	ヤ行	ラ行	ワ行
	得	受	痩	捨	兼	辨	誉	消	枯	飢
㊀む	エ	ケ	セ	テ	子	ヘ	メ	エ	レ	ヱ
㊁	エ初む	ケ取る	セ衰ふ	テ遣る	子勤む	ヘ知る	メ称ふ	エ行く	レ凋む	ヱ苦む
㊂	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ル	ウ
㊃	ウル宝	クル物	スル身	ツル物	ヌル務	フル事	ムル事	ユル雪	ル、草	ウル人
㊄	ウレ	クレ	スレ	ツレ	ヌレ	フレ	ムレ	ユレ	ルレ	ウレ

	第五格	第六格	第七格	第八格
	カ行變格	サ行變格	ナ行變格	ラ行別格
	来	為	往イ 死シ	有ア 居オ
㊀む	コ	セ	ナ	ラ
㊁	キ煩ふ	シ果す	ニ 訖ぶ 失す	リ 附く 定る
㊂	ク	ス	ヌ	リ ㊁ (ト カシ)
㊃	クル人	スル業	ヌル	ル 事 人 ㊃ (ラム ベシ メリ マジ ナリ)
㊄	クレ	スレ	ヌレ	レ

形状言	苐九格 苐一音雑 浅・深	苐十格 苐二音雑 悉・悲	
續用言	三	シ三	一
續用将然言	ク（思ふ・頼む）	シク（ある・思ふ）	二
絶止言	シ	シ	三
續体辞言	サ	シサ	四
續体言	キ（心・心）	シキ（事・事）	五
已然言	ケレ	シケレ	六

附言本書八衢の図にも一段用言例の射の字を其苐一のア行に属したまど今ハ苐五のヤ行に属してア行を省きつ又中二段用言苐四マ行の例に試の字をあげられたりしを今ハ恨の字に換へ又同ワ行の例に率の字を出されたりしをも省きて其行を一段用言苐六のワ行に係をきつ又下二段用言苐一ア行の例なる得乃字エ、ウ、を一音を轉し且母音の活くもいと珍しきまど本書のまゝに出しつゝ萩原ぬしの詠哥心の種に見えたり又本書にある四段用言の中よりラ行別格を混じたりしを今ハ語彙別記乃例によりて變格の後に出しつ

右図の讀法左のごとし

四段用言	飽カむ、	飽キ足る、	飽ク、	飽ク食、	飽ケ、
一段用言	着キむ、	着馴す、	着ル、	着ル衣、	着レ、
中二段用言	起キむ、	起キ出づ、	起ク、	起クル人、	起クレ、
下二段用言	得エむ、	得初む、	得ウ、	得ル宝、	得レ、

カ行変格　来(こ)む、　来(き)煩ふ、　来(く)、　来ル人　来レ、
サ行変格　為(せ)む、　為(し)果も、　為(す)、　為ル業、　為レ、
ナ行変格　往(い)ナむ、　往ニ詑ぶ、　往ヌ、　往ヌル人、　往ヌレ、
ラ行別格　有ラむ、　有リ附く、　有リ、　有ル事、　有レ、
第一音雑　浅三、　浅ク思ふ、　浅シ、　浅サ、　浅キ心　浅ケレ、
第二音雑　惡シ三、　惡シクある、　惡シ、　惡シサ、　惡シキ事　惡シケレ、

右用言の各其初行の讀方のことをあげたり次行以下も此に倣ふべし

[三] 希求言使令言の辨

他に事を然きよと命ずる言に二種あり其一を希求言といひ其二を使令言といへり此を其用言の

つかひざまによりてれ此づかひに二様に分るゝをのせまで左にあぐるはさる図解と尚第四章[二]の受辞とによりて能考合すべきなり

四段用言	ケ、セ、テ、ヘ、メ、レ、	
一段用言	キ、ニ、ヒ、三、イ、井、	
中二段用言	キ、チ、ヒ、三、イ、リ、	
下二段用言	エ、ケ、セ、テ、子、ヘ、メ、エ、レ、ヱ、（古の格）	エ、ケ、セ、テ、子、ヘ、メ、エ、レ、ヱ、
カ行変格	コ、	
サ行変格	セ、	
ナ行変格	子、	
ラ行別格	レ、	レ、

ヨ

附言、形状言の下にカレといふ字を添へたる言あるやうなれども此ハ用言の活係りにクといふ字よりラ行別格のアレ（有）に受けてクアレといふこゝに約りたるなるべし

右図の讀法左のごとし

四段用言　飽ケ、

一段用言　着ヨ、

中二段用言　起キヨ、

下二段用言　得ヨ、

カ行変格　来ヨ、

サ行変格　為ヨ、

ナ行変格　往子、

ラ行別格　有レヨ、有レ

右用言の各其初行の讀方乃ミをあげたり次行以下も此に傚ふべし

四　作用言五種の解

第一、將然言とハ其作用の將に然らむとする言にて未来をいふ又受辞によりて願言ともなるなり此一段ハ揔て語尾にム、の字を加へて其意を味ふべし

第二、續用言とハ其作用の用言へ續く言にて又言居られど体言となるべし扱其体言となる

をいふ四段用言、一段用言、中二段用言、ハ何れも第二の音を言居ゑ又下二段用言ハ第四の音を言居ゑたる者にて此を用語体言ともいへるなり

第三、絶止言とハ其作用の用言へも体言へも続かず語意爰に至りて絶止まる言にて現在とも又上にハ、モ、ノ(軽)、徒、なぞ云係辞ある時ハ其結辞となるなり但し係結の辞のことハ第三編の第一章にいふべし

第四、続体言とハ其作用の体言へ続く言にて現在をいふ又上にゾ、ヤ、ノ(重)、何、などの係辞ある時ハ其結辞となるなり

第五、既然言とハ其作用の既に然るをいふ言にてされども未全く過去ならざるが故に半過去とも又上にコソの係辞ある時ハ其結辞となり又上に係辞なくして語尾にケ、セ、テ、ヘ、メ、レ、の音のみいふ時ハ希求使令の言となるべし

五

形状言六種の解

第一、続用言とハ其形状をいふ言を用言に續くるを定格とす或ハ仮に体言に続くことありとも其意ハ必用言に続くものとするべし

其例

(一)山高み見つゝわがあかし櫻花　古今二

(二)風をいたみ岩打つ波のおのれのみ　詞花七

附言此形状言のシ三にそ絡る、ことあり其そ四段用言の苦マム、苦シ三、苦シム、苦シメ、といへる類の苦シ三にあらずして爰のは斯く活らざるシ三なりと語彙別記に見えたり

第二、続用と将然を兼ぬる言とは其形状をいふ言の或は用言に続き或は将然となる言をいふなり

其例

(一)深く思ひそめつといひし言の葉も　後撰十三

(二)かくこそは今はあぢきなきおもはれなくぞ　古今十四

第三、絶止言とは心の浅し、人の戀し、など現在のシにして其語意爰に至りて絶止めたるなり又係辞を結ぶことをも作用言のと相同じ

第四、續体辞言とは心の浅き、人の戀しき、などのにて其言の続体言乃受辞は続くべきものを以へりけて其受辞を続体言のと相おなじ又上にが、の、等の係辞ある時は其結辞とするは体言よりもノと係り用言よりもがと係るが定格なり其例

(一)おひ先を千代もとなづる袖のをさなさを　後拾遺七

(二)さびしげふ宿を立出てながむまで　同　四
(三)落たる月乃影の寒さき　新古今六
(四)夢あき人めをかると見るがわびしき　古今十三

第五、續体言とは其形状をいふ言の体言ふ續くをいふなり又係辞を結ぶことも作用言のと相同じ

第六、既然言とは其形状の既ふ然るをいふ言ふて まゝも未全く過去ならざる故ふ半過去とす又係辞を結ぶことハ作用言のと相同じ

六 用言の俗譯

第一格四段用言（第三音 第五音）ふ轉ふ言

第二格一段用言　第二音の下ふ（ル ヨ）の字を附ていふ言

第三格中二段用言　第二音の下ふ（ル、ヨ）の字を附ていふ言

第四格下二段用言　第四音の下ふ（ル、ヨ）の字を附ていふ言

第五格カ行變格（クル コウ）といふ言

第六格サ行變格（スル シヨウ）といふ言

第七格ナ行變格（ヌル ノ）といふ言

第八格ラ行別格（ル ロ）といふ言

第九格第一音雜格　イといふ言

第十格第二同　シイといふ言

右俗訳も譬ハ四段用言ふてハ飽字の行を飽久、飽コウ、といひ押字の行を押ス、押ソウ、といふが

如く又一段用言にても着字の行を着ル、着ヨウ、といひ又似字の行を似ル、似ヨウ、といふが如し此他ハ此に倣ひて志るべし其中にも中二段用言なる第三音の第二音に轉ひたる下にル、レ、の字を附加へ又下二段用言なる第三音の第四音に轉ひたる下にル、レ、の字を附加ふまで俗言にてなすることも初學の人の誤やすき言葉なり扨又言の轉ひによりて第一音乃字を第五音乃字に書違ふるなどハ四段用言のをなどす漢字音の假字用格にも誤ることも多くまで能く其意を注ぐべし

七

復習の問題

(一) 八衢の図中四種の用言とハ何の格をいへるか
(二) 用言の語尾にル、レ、の字の加はるものハ孰乃格なるや
(三) ラ行別格の用言も他格と如何なる差別あるや
(四) 形状言ハ作用言と如何なる差別あるや
(五) 四段用言のカ行の用字を入替て読め
(六) 又問中二段用言のハ行乃用字もいへ
(七) 又問下二段用言のヤ行の用字ハいかに
(八) 形状言二格の其用言を入替て読め
(九) 第二格一段用言にかゝる行も何々なるか

(十)第六格サ行変格の読法ハ如何

(十一)第八格ラ行別格乃読法ハ如何

(十二)四段用言の希求、使令、となる読法ハ如何

(十三)将然続用絶止続体已然の各言其意を説明をよ

(十四)又問形状言の活用なる続体辞言の意を説明せよ

(十五)中二段と下二段用言の俗言となるゝそのは第何段の音より何段の音に轉ひたるヿ

○第四章　用言受辞（ハタラキコトバノウケテニヲハ）

用言受辞とは用言を其他の用言或ハ体言に結合をなさしむる為に用ゐる辞をいふなり　扨其作用言の通常格四種と変格三種なるは其受辞共に相同し又其他の別格と形状言の音雑格なるは其受辞各相同からず斯て受辞にも亦活無活の二種あり今左に其図を物して委く示さしむ然れども前章（第三）に掲げたる八衢図の用言を諳記し来り其に次図に掲ぐる所の受辞を接きて讀下して熟く其意を味ひ見るべし

[一] 作用言受辞の図

将然言 ㊀				
不	将	将為	将往	則
ズ ぬ	○	マセ ら	ナム うあらよい（願の意にして活くことなし）	バ らあら
ズ	ム う	マク		
ズ	ム	マシ		
ヌ	ム	マシ		
子	メ	マシカ		

右図中の辞に活のあるもあり又活のなき者もあり然て其活のあるは辞乃上段を其意軽くして下段に至るに随ひ其意重くなるなり其理は第三篇第一章の紐鏡の図によりて餘はあきらむべし第㊁続用言以下もこれになずらへてよ

続用言 ㊁			
竟	来有	将往	既
テ た	ケラ たじや てきた	○	ケ であつた
テ	ケリ	ナム てしまう	○
ツ	ケリ	ナム	キ
ツル	ケル	ナム	シ
ツレ	ケレ	ナメ	シカ

絶止言 ㊂						
将有	可	見有	不可	也		
○	○	メラ とみえた	○	○	ト 飽くとやうに絶止りたる言をトと再おこして下へいひつくる辞あり	カシ 切まる辞の下に接きて願ふ意を含め或は他に任を思はせる意もあり
ラム であらう	ベク であらうさうな	メリ	マジク まい	ナリ ぢや		
ラム	ベシ	メリ	マジ	ナリ		
ラム	ベキ	メル	マジキ	ナル		
ラメ	ベケレ	メレ	マジケレ	ナレ		

哉	於	在	
カナ　ぢやなあ	ニ	ナラ　である	ヲ
		ナリ	
		ナリ	
		ナル	
		ナレ	

④ 続体言

此㊃のナリもニアリの約ふてナラムと活くことゞもあつて㊂のナリとハ其意このちまろ鋪田年治ぬし雅俗文法の頭書ふいへろく此続体言の受辞よナリ(在)とのミ受くるを片ちなるべしナリ(在)ナリ(也)二種とよふ受くべし古今の序よ「赤じ紅山乃炬もたらずなりふこの孔橋をつくるなりやきく人を云

々」と斯く例を引りまてり

則	雖
バ　たゞそうで、	ド　たゞなれど、
	ドモ　(ドふモの加わりたる)

⑤ 已然言

右図の外ふも尚種々の受辞あれど其類を推て知るべし扨各用言の下ふある其條下の辞を以て受接ぐを定格とす然るふラ行別格乃受辞㊀将然言、㊁続用言、㊄已然言ハ通常格の如くなれども絶止言ハ第㊁受辞ふト、カシ、の二辞相加わり又これふ反して続体言ハ第㊂受辞の中ト、カシ、の二辞を除きて其餘ふ第㊃受辞を併用ある故よ此を別格といふなり

其例

(一)ちはやぶる神代もきかず。立田川　古今集五
動きなきいはほのはても君ぞ見む。　拾遺五
春来ることを誰かしらまし。　古今一
心あらば今一たびのみゆきまたなむ。　拾遺十七
心は花になさばなりなむ　古今十七

(二)我宿は雪ふりしきて。道もなし　同六
霧はたちおきてまふもなかりしつ。　後撰六
今一しほの色まさりけり。　古今一
わたらば錦中やたえなむ。　同五
色にや見えし。山吹の花　後拾遺十八

(三)春たつけふの風やとくらむ。　古今一
此哥もかくのごとくなるべし。　同序
立田川紅葉みだれて流るめり。　古今五
音にのみ聞きてはやまじ。あさくとも　後撰十六
よをうぢ山と人はいふなり。　古今十八
つひにわちいかでなるど。しるべく　同十九
言の葉はたゞにかけよかし。君　後拾遺十四

(四)みなかのゝもあらぶる心あらじかし。　同三
をみなべしうしろめたくも見ゆる哉。　古今四
色なき露もおきえじと思ふぞ。　後撰七
故郷さむくなりまさるなり。　古今六

春霞たつを見すてゝ行雁は　同一

(五)ときはなる松のみどりも春くれば　同一

春たてば花そ匂ふ山里ハ　同一

春あけてなれどもいまだ雪はふりつゝ　同一

二 希求言使令言受辞の図

希求言	ト、トモ、チウ、テウ、トフ、テヘ、（体言受辞と同し）
使令言	カシ

附言用言の語尾に附加なる辞によりて希求むる意とあり或ハ命令する意ともなるこそあり今其辞を挙ぐると左に記すがごとし

子、将然言より受くる辞にして願ふ意となるを

テヨ、テの字に歎辞乃ヨの字の加たりたるなり

ナム、将然言より受くる方乃辞にして上の係りもハ、モ、徒、などの係字に限るなり

マシ、然せむと其事に趣く意なり

モガ、モに願ふ意のガの加たりたるなり

モガナ、上のモガにナの字乃加たりたるなり

シガ、上にモガと同しきまど続用言より受くる辞なり

シガナ、上のシガにナの字の加たりたるなり

バヤ、成行を願ふ意なり

コセ、　コセは願ふ意の辞之此ハ本ト オコセ オコス などいふとの上畧なるべし万葉集にもコスナといへるとあり此ハコセの裏にてやがて勿れと願ふ意之と言霊のあるべきにさきり
コソ、　コソをコセの移れる詞の玉緒にもコセもコソの移れりとあるも同しことながら本末を違へりと同書にも見えて係辞のコソとも其意異なること

其例

たれを見よや花さけるらむ白雲の　古今十六
言の葉にたまかけるかし君　後拾遺十四
春風は花のなき間に吹はてね　拾遺十六
うき世の中は夢になしてよ　新古今十三

三

形状言受辞の図

あし引の山のまにまにかくれなむ　古今十八
みちゆきふりにことやつてまし　同一
心がへするものにもがかた戀も　同十一
君が八千代にあふよしもがな　同七
むこのり此間にも君を見てしが　後撰十二
家の風をとも吹かせてしがな　拾遺八
心あらむ人に見せばや津の國の　後拾遺一
秋風にこゑを雁につげこせ　後撰五
我をいりぬと妹につげなにそ　万葉十一

㊀	㊁	㊂	㊃	㊄	㊅
續用言	續用將然言	絶止言	續体辭言	續体言	已然言
三 シ三 等の辭を語尾に加ふるのミにて其他の受辭なし又カナ、ニ、ナリ、ヲ、などの受辭或ハ係辭に續くものハ皆用語体言なり	バ、 テ、 シテ、 ト、 トテ、	ト、 トテ、 カシ、	カナ、 ニ、 ナリ、 ヲ、	カナ、 ニ、 ナリ、 ヲ、	バ、 ド、 ドモ、

附言第㊀續用言の浅ミ、戀シ三、といふを俗に浅サニ、戀シサニ、といふ意なり若サニと聞えがたき時ハキユヱニやと訳し又其上にヲの字あらでがと訳して見るべしと詠哥心の種に見えたり

然て其他の受辭を皆作用言の意や異なることなけれバ爰に重ねて弁ぜざるなり

其例

(一)秋のの田のかりほの庵のとまをあらみ 後撰六

(二)吹風に深き頼みのむなしさぞ 同六

宿見れど寐ても覺ても戀しくで 同廿

思ひやる雪も山路も深くして 後拾遺六

かくのみ故に長くとおもひき 万葉二

[redacted]

(三)秋の心をあさしや思ふむ 後撰六

つらしとて我さへ人を忘れなぞ 詞花八

（四）[redacted]

さびしさに宿を立出てながむまで　後拾遺四

[redacted]

はゝま江の底乃深さをよそふらる　後拾遺三

（五）初雁のけさ鳴声のめづらしきかな　古今四

すゝなりし都乃月のさやけきに。　後拾遺十五

色も我とあますきありまで　後撰十七

（六）打はへて春をはだあり長閑きを。　同三

故郷も吉野の山し近ゝまで。　古今六

霞たつ春の山べを遠けれど。　同二

まちかねてつらきを見るらむぞそれどぞ。　後撰十四

四 復習の問題

（一）四段用言の飽といふ字に㊀将然言の受辞をうけてよめ

（二）一段用言の似といふ字に㊁続用言の受辞をうけてよめ

（三）中二段用言の老といふ字に㊂絶止言の受辞をうけてよめ

（四）下二段用言の消といふ字に㊃続体言の受辞をうけてよめ

（五）ラ行別格の有といふ字に㊄已然言の受辞をう

までよめ
(六)作用言のトといふ字へは何言より受之るゝ
(七)受辞にバといふ辞二所に出て其意かはれり各属する所をいへよ
(八)文間カナ、ニ、ナリ、ヲ、といふ辞へも何言より受くるか
(九)形状言受辞の中にトの字二所に出より何言の受辞なるゝ
(十)作用言受辞の中ナム、ナリ、といへる辞二所に出たり各何言の辞なるか

○第五章　自他用言（ワレヒトノハタラキコトバ）

詞の通路に云く歌よむにも文章かくにも事を記すにも萬の事をかたち其様を委くしるすなれどももろ〳〵此自他の言葉の活きを要と意得べきわざなり其も自然の定格ありて此方のことをいふには此方に用ふべき言をえらひ彼方のことを語るにはまた彼方に用ふべき言をつかふれば其事委くきこえて自他混雑して詞整はず其様聞えがたし されバなほざりに思過さずよくわきまへ置くべきことなりといへり扱此自他の用言を詞の通路にも其種類を六段にわかたれけれども語彙別記にこれを約めて四等と為せり今其図

によりて用言の自他をわかつこと下に記すが如し

一 自他用言四等の図

等	自他	種類六段	設例	
第一	自	おのづから然る	おのづから	見ユル 聞コユル
		みづから然る	みづから	見ル 聞ク
第二	自	然する	みづから人に	見スル 聞カスル
第三	他	他に然せさする	他に	見サスル 聞カスル
			他に	見セサスル 聞セサスル
第四	他	おのづから然せらるゝ	おのづからに	見ラル、 聞カル、
		他に然せらるゝ	他に	見ラル、 聞カル、

上例の意を推ひろめて細に其目をあらはしむるは下図のごとし

	遊	立	習	解	落	乱	隔	思
第一等	ブ	ツ	フ	クル	ツル	ル、	ツ	フ
第二等	バス	ツル	ハス	ク	トス	ス	ツル	ハスル
第三等	バスル	タスル テサスル	ハスル	カスル	トサスル	サスル	テサスル	ハセサスル
第四等	バル、	タル、 テラル、	ハル、	カル、	トサル、	サル、	テラル、	ハル、

右図の第一等ハ四種用言の混雑よて然る言とあり第二等も同用言の混雑ふて然する言となり第三等ハ下二段サ行の用言よて然をさする言となり第四等も下二段ラ行の用言ふて然をうるし言となるあり

三 自他用言轉用の辨

(一) 語尾よルの字加もりて然する言の然る言よ變する例

	然する言	然る言
碎	ク	クル
開	ク	クル
燒	ク	クル
閉	ヅ	ヅル
延	ブ	ブル
定	ム	マル
折	ル	ル、
切	ル	ル、
治	ム	マル
進	ム	マル

(二) 語尾よスの字加もりて然る言の然する言よ變する例

	然る言	然する言
驚	ク	カス
落	ツ	トス
迷	フ	ハス
起	ク	コス
滅	ブ	ボス
聽	ク	カス
死	ヌ	ナス
眠	ル	ラス
枯	ル	ラス
出	ヅ	ダス

右何れも語尾に他字の加わりて変ずる時ハ其本音の同行第一第三第五の音に轉ずる所定格なり

(三)語尾にスル、サスル、といふ字加わりてら然をはする言となり又ルヽ、ラルヽ、といふ字加わりてら然をうけし言となる例

第一格 四段用言	飽カ 押サ 打タ 逢ハ 住マ 釣ラ	スル ルヽ
第二格 一段用言	着キ 似ニ 干ヒ 見ミ 射イ 居ヰ	サスル ラルヽ
第三格 中二段用言	起キ 落チ 戀ヒ 恨ミ 老イ 舊リ	サスル ラルヽ
第四格 下二段用言	得エ 受ケ 痩セ 捨テ 兼子 辨ヘ 誉メ 消エ 枯レ 飢ヱ	サスル ラルヽ
第五格 カ行変格	来コ	サスル ラルヽ
第六格 サ行変格	為セ	サスル ラルヽ
第七格 ナ行変格	往ナ 死ナ	スル ルヽ
第八格 ラ行別格	有ラ 居ラ	スル ルヽ

三 復習の問題

(一) 左に掲ぐる(一)(二)(三)(四)(五)の各其自他を分て

治まる御代には安く住まるゝ

(二)来ぬ人を待つ　又我を待たする

(三)通ふ道　又通はる、道

(四)夜の明くる　又夜を明かす

(五)手習ふ児　又習はるし業

(六)四等に通ふ自他の用言をあげよ

(七)然ある言の然る言となる用言をあげよ

(八)然る言の然する言となる用言をあげよ

(九)スル、ル、と両様になる用言をあげよ

(十)サスル、ラル、と両様になる用言をあげよ

詞乃橋立第二篇畢

明治十七年十月廿四日板権免許

同　十八年三月出板

[redacted]

定價十六錢

著者　山口縣士族　弘鴻

山口縣周防國吉敷郡山口馬場殿小路町第四十七番屋敷居住

出板人　同　弘進

同所居住

日文堂蔵板書目

周防山口
馬場殿小路　弘進

弘鴻　著述
珠算新式
全部十冊

此書ハ珠算の新式ニして加減乗除并ニ定位の法則より相場割利足求積開平開立方等ニ至るまで深切ニ説明したる小学科適用の書なり

弘鴻　編集
詞乃橋立
全部五冊

此書も五十連声の来由より仮字用格延約の法体言用言語際結辞冠言の解義詞の組立等ニ至るまで深切ニ説明したる和文学科適用の書なり

弘鴻鑒定　横畠武二編集
洋算例題答射後篇
全部二冊

此書ハ陸軍省御蔵板洋算例題の答式ニして代数学を説明したる秘鍵の書なり

弘鴻　著
視径儀自在
全部一冊　近刻

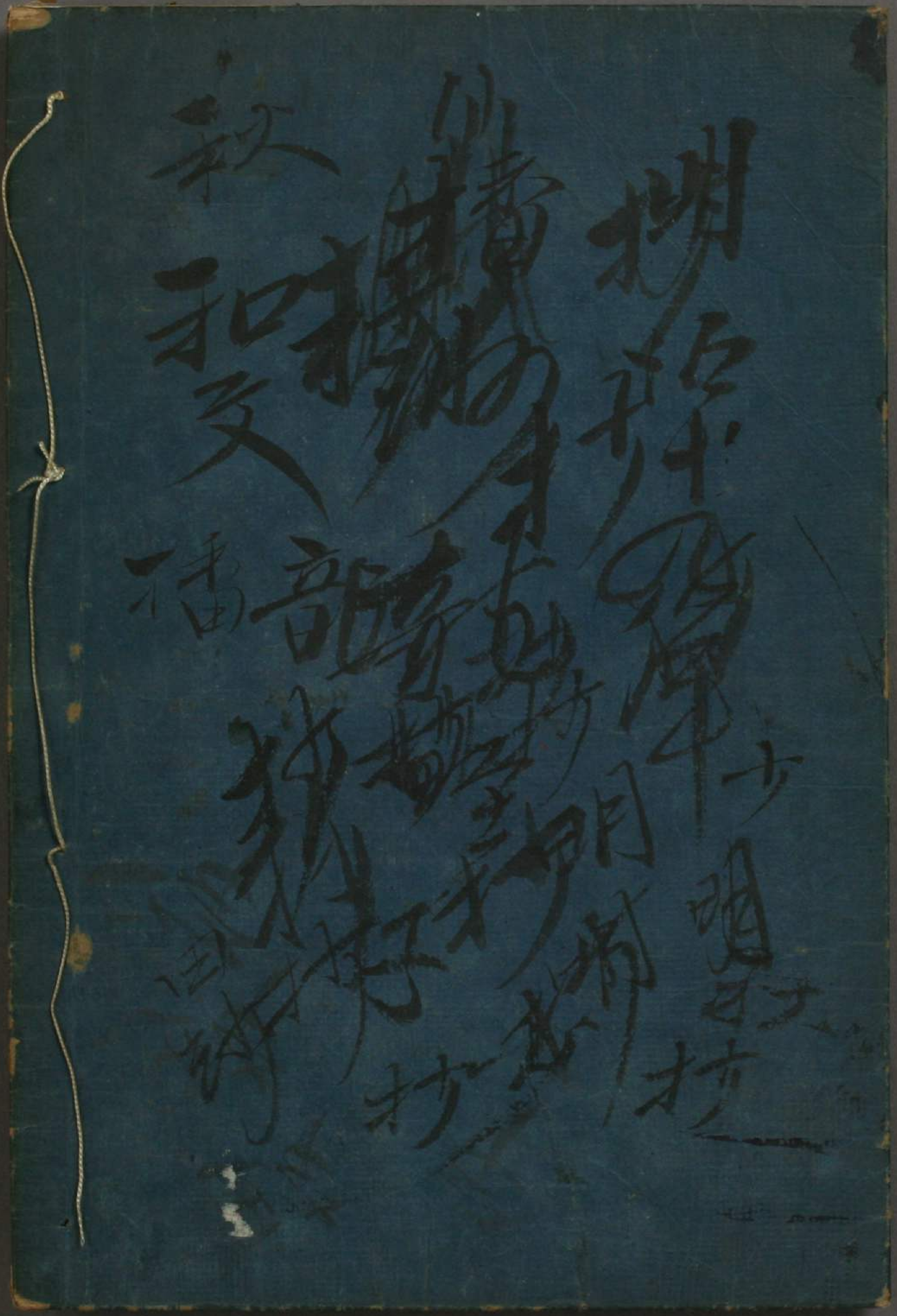
此書ハ遠距離の測量ニ用ゐるニ便ニして懐中せしむべき測器の製造用法を説明したる書なりまた兵家ニも殊ニ至宝の書なり

弘通所

東京日本橋通二丁目 稲田佐兵衛
同 南傳馬町三丁目 吉川半七
京都寺町通四条上ル町 田中治兵衛
大坂北久太郎町四丁目 柳原喜兵衛
同 備後町四丁目 梅原亀七
尾張名古屋本町三丁目 川瀬代助
加賀金澤安江町 近田太平
出雲松江本町 園山喜三右衛門

山口縣内弘通所

萩瓦町 松原喜兵衛
赤間関西南部 立野榮治
同入江町 山名松次郎
豊浦中濱町 村谷傳三郎
厚狭市 伊藤利八
同 早馬小輔
舩木 中原卯兵衛
同 生田新一
宮市新町 開化堂
同今市 藤井勝平
徳山西松原 久野道右エ門
同本町 浅田英積堂

熊毛野原 久保源吉
同平生 生野五郎左エ門
同平生土手町 星出佳六
柳井本町 留島藤十郎
高森 大庭政太郎
岩國新小路町 米谷判蔵
同本町 河村啓太郎
同新町 白銀伊兵衛

山口大市 松原文店